©神奈川新聞社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

第50回 神奈川新聞 文芸コンクール

作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。入選作は順次掲載します。

次回は21日の予定

短編小説 ● 佳作④

路を泳ぐ魚

小石珠作

こいし・たま　本名・岸尚子（きし・なおこ）。1979年生まれ。パート。川崎市高津区。

歌うように、僕を呼ぶ声が聞こえる。

まどろみながら顔を上げると、開け放たれた窓から、白い塊がなだれ込むのが見えた。白い塊は教室をぐるりと回る。

白い塊が触れた色褪せた水色のカーテン、壁を横断する年表、掲示物は盛大な音を立てながら踊り、教室には歓声に似た悲鳴があがる。白い塊は渦巻き、吹き上げたと思ったら一枚のプリントが僕の顔を覆った。口を押さえつけられた感覚に、僕は焦って引き剝がす。

落ち着きを取り戻しつつある教室内を、席からぼんやり眺めていると、視界が突然遮られた。見上げると、環奈が僕の机の前に立つ。

「それ、私の」

僕が手に掴んでいるプリントを環奈は指さして言った。しわくちゃになってはいるが、印字された地図や文面の脇に、手書きのきれいな文字がびっしり記入されている。僕の机の上の、配られたままのプリントより価値があるのは一目瞭然だった。

「今野くん、フランケンになってるよ」

破れかけたプリントを受け取ると、ラインストーンが散りばめられたピンク色の長い爪で、自分の額を指さしながら環奈は言った。

僕は席を立ち、掃除ロッカーの内側に付いた小さな鏡を覗き込む。ほんとだ。枕になった筆箱の、ジッパー部分がくっきりと縫い目になって額に走っている。前髪を手で額に押し付け、ロッカーの扉を閉めると、席に戻る途中の環奈と目が合った。

環奈はまた額に指をあてて笑い、僕に背を向け着席した。毛先を巻いた栗色の髪が背中で揺れる。

環奈は、僕に何を言うのだろう。

「放課後、教室で話したいんだけど」

今朝、登校し教室に入ろうとした僕に、環奈が言った。二人きりで今日、話せる?と突然聞かれ、環奈から漂う甘い匂いを嗅ぎながら、僕は頷くことしかできなかった。

それからずっと考えている。

昨日の、高校最後の球技大会の打ち上げで、環奈と何か、同じクラスの一人から変化するような出来事はあっただろうか。

みんなでカラオケに行き飲食し、河原で花火。数人はチェキを持ってきていて、撮ったそばから写真を配っていた。環奈も、花火を両手に持ち、ふざける僕を撮ってくれたけれど、チェキから出てきた写真をみて、鞄に仕舞った。失敗しちゃった、と見せてくれなかった。直前に撮った他の奴には渡していたのに。環奈がチェキまで鞄に仕舞ってしまうので、何となく気まずくて、僕はその場を離れた。環奈と絡み、違和感があるとしたらあの一瞬。いまさらあの写真をわざわざ?写真に託けて告白とか。いやいや。僕が同じ塾の男子と、梓先生のファンをしていることを環奈は知っている。梓先生は、教え方のうまい人気講師だ。外見は黒髪の清楚系、アイドル超えの顔とスタイル。さらに要点が頭に入る授業、と聞いて、僕も1年の冬から入塾した。それ以降、スマホの待ち受け画面は、隠し撮りした笑顔の梓先生。キモいとクラスの女子にはバカにされている。環奈も然り、じゃなかったのか。

窓が閉められ、授業が再開する。

風は執拗に窓を叩いている。

どこかの閉め忘れた廊下の窓から、突風が校舎に入り込み、大きな塊となって廊下を駆け巡っている。ガタガタと古い校舎の木製の引き戸や窓枠、ガラス窓をゆすり、走り去った。

僕は不意に探されているような気分に襲われ、気配が近付くとつい、息を止めてしまう。

中学の頃、こうして風が廊下を走り抜けている日に、青い火をみたことがある。

サッカーボールくらいの青い火が、廊下の向こうからゆらゆらとやってきて、開放された前方のドアから教室に入り、黒板に板書する教師のまわりを浮遊し、また、前方のドアから廊下へ出ていった。

曖昧な記憶が、時々、紐解かれる。

「今野くんは、霊感がある?」

みんなが帰った教室で、神妙な顔をして僕を見上げて問うている環奈の赤い唇、長い睫毛。環奈から視線をずらし、また環奈を見つめた。期待して一日、環奈を盗み見していた僕は、動揺の中、環奈の問いを反芻する。

「れいかん?」

「うん。よく変なもの見ちゃったりする?」

環奈が聞いているのは、おばけの類の霊感、それが見えるかどうか、だという事をやっと理解し、平静を装いながら答える。

「たぶん、よくは見てないかと」

「見たことはある?」

思い出せず、首を傾げる。

「そっか。おばけ苦手?」

頷く。遊園地のお化け屋敷程度ならまあ平気だけど、曰く付きの廃屋だの橋だの、そういう場所に近付くだけで気分が悪くなる。

「えっと、なんで、霊感?」

「昨日、チェキ撮ったじゃん。ばっちり写っちゃってて」

申し訳なさそうにいう環奈に、あぁ、そういう事かと納得がいく。

「男の子って全然平気な人もいるから。面白がる人と、でもダメな人もいるから。見せるのも、今野くんに確認してから、と思って」

昨日、あの場で環奈が心霊写真を披露したら、さらに盛り上がっていただろう。被写体の僕は見たくなくても、たぶん、見ざるを得なかった。

あの時僕は、嫌な顔をしていなかっただろうか。環奈の気遣いに、申し訳なく思う。

「あ、霊とは、違うかもしれないけど」

青い火が教室を漂っていた話をすると、環奈は、違わないと思う、と言った。白い塊に見えた風にも関心を示した。もっと小さな、野球ボールくらいの青い火が、田舎のおばあちゃんちや山の中で見えたのも、見間違いじゃないよ、とはっきり言った。あやふやで言えなかったものが肯定されると、形を持つ。僕は嬉しくなった。他に何かあったか思い巡らせても咄嗟に思い出せず、ふと、逆に問う。

「環奈は、霊感あるの?」

多少ね。環奈がそう言った瞬間、風が窓ガラスにぶつかり、大きな音を立てて揺れ、僕は飛び上がって腰かけた机から転げ落ちた。環奈は、大丈夫?と笑いながら僕の腕を引っ張りあげた。

「写りこんじゃってるの、たぶん、今野くんの守護霊なんだと思う。悪い気配がないから、守護霊か、今野くんを守ろうと取り巻いているうちの一人か」

「俺の守護霊だったら、俺は、見ておいた方がいい?」

環奈は首を振って、必要ない、と言った。「もっと霊を身近に感じたいっていうなら別だけど、苦手意識があるなら。かなりはっきり写っちゃってるし、見ない方がいい」

僕の周りにはそういう類が多く居て、僕に気付いてもらうのを待っているらしい。いまは悪意のある霊ではないけれど、気付いて下手に同情すると、豹変して、身体を乗っ取られることもある。

環奈の説明は、無駄に怖がらせようという感じがなく、わかりやすかった。時々見えてしまっても、今後もスルーすればいいというのが、シンプルでいい。

「じゃあ、やめておく」

かなり執着した感じの守護霊、という僕のファンの姿も気になったけれど、僕は見ないまま、環奈に写真の破棄をお願いすることにした。環奈に感謝の言葉を伝えると、環奈は、聞きたくなかったら言って、と前置きして、ぽつりぽつりと話し始めた。

環奈の父親は転勤族で、小さい頃は転々と引っ越しをしていた。一時、地方の山奥に住んだことがあり、そこが、そういう場所だった。

見えないものが、見える場所。

夜中の小学校なら、よくある学校の怪談だけれど、真昼間の小学校、日常的にみんなが遭遇する。

通学路の木の陰に、特に小学校に、見えないはずの者が立って、じっと見ている。

転校して来たばかりの小学二年生だった環奈は、遭遇に怯え困惑したけれど、親切な女の子たちは環奈に「見えない」ことを教えた。見えないはずの者は、漂う人で、見えると頼って付いてきてしまう。だから、見えないふりをするのだと。

漂う人は、年齢性別様々だった。トイレの鏡を見れば、自分の後ろにいつも誰か写っている。教室の隅に立っている。ぽつんと一人、無表情で立っている者が多かったけれど、少し離れてもう一人、ぽつんと立っていることもあった。漂う人がクラスに現れると、子供たちは、あ、という顔をして、仲良し同士、目配せする。土地の子供の、日常。

夕陽に染まる下校時間、誰もいないはずの体育館で、子供たちの遊ぶ声が聞こえる。大縄をしているのか、縄が床を叩き笑い声が起きる。大勢の、漂う子供たちの声。

一緒に帰る女の子たちが「たくさん来てるね」「楽しそうだね」と、環奈を挟んでそっと笑いあっているのを見て、環奈もほっとして、笑った。

夕焼けの空の下、体育館も友達も金色の眩い光に包まれている。環奈の居る景色は、美しさに満たされて、きっと少し悲しい。

個々が持つ霊感というのではなく、その土地の持つ強い霊力に、漂う人が集まるのか、漂う人の姿を子供たちにはっきり見せていたのかわからない。そういう霊気の強い土地で珍しく長く五年を過ごし、離れたにも関わらず、環奈はいまだに時々見えてしまう。

僕が怖がっていないか、僕の表情を見ながら柔らかな口調で話してくれる。

「最近も?」

「最近は…。そう、お姉ちゃんの大事にしていた人形に、突然、名前呼ばれて」

環奈は笑って説明しようとするけれど、背中が寒くなった僕は、慌ててその話は止めてもらう。

環奈と校門を出る。手を繋ぐ関係にはならなかったけれど、環奈と僕の距離は大きく変わった。じゃあ、と手を振り背を向けた環奈の制服が突風で大きくはためき、短いスカートの内側が至近距離で露になる。僕は咄嗟に背を向けて、自転車を漕ぎだした。

残像はまだしっかりと脳裏にある。守護霊に風を操る力があるかどうか、今度、環奈に聞いてみよう。

塾から離れたパチンコ店の駐輪場に、原付を停める。バイクによる通塾は認められていないから、少し歩くけれど仕方がない。

原付の鍵を抜いて顔を上げると、黒いBMWがパチンコ店の低い塀の向こうの道に停まり、助手席の女が運転席の男にキスをした。男は女の頭を押さえつけるように抱き寄せ、もう片方の手でスカートの中の脚に触れようとしている。キスをしたまま、長いスカートの裾を手繰るから捲れ上がる。あと少し、そう思っていると、女は男を振りほどいた。黒光りする高級車から降り、男に手を振る女は、見覚えの横顔と笑い声、梓先生だった。僕は慌てて、塀の内側に小さくしゃがみ込む。

強風が真っ黒な雲を運び雷雨になったのを、僕は塾の教室の窓から、親近感を持って眺めている。梓先生の笑顔をスマホから削除したら、待ち受け画面の時間がくっきりと、よくわかることに気付いた。告白もしていないのに今日は一日、二回も振られたような気分だ。

三時間の授業を終えて塾の外に出ると、風も雨も嘘のように止んでいて、空はすっかり晴れていた。雲一つない黒いスクリーンに、明るく星が見える。

パチンコ店の駐輪場に停めた原付は、吹き込んだ雨、もしくは立ち込める湿気に濡れていた。家に帰るだけなので、濡れたシートにそのまま跨りエンジンをかける。濡れた原付のシートと、黒いBMW。比にならないけれど、今の僕に似合うのは、貯金を叩いて買ったこの原付だろう。

塾のある市街地から1キロ、さらに雑木林や果樹林が両脇に広がる坂道を2キロ越えた先に、僕の家はある。最寄りのバス停は夕方には終了し、信号もない一本道に人通りは皆無。街灯の間隔は広く、遠く向こうで申し訳なさそうに照らしている。暗い道を原付のライトが、僕のハンドル操作に合わせしっかりと照らす。切り開いていく感覚が思考をクリアにする。

目撃した梓先生の姿を、友人に得意気に披露すれば必ず盛り上がる。だけど確実に、梓先生は揶揄と中傷に晒され、僕は後ろ暗い後悔に塗り潰されるだろう。僕はそれを望まない。胸の内で全て消去すればいい。環奈がそっと鞄に仕舞い、破棄してくれた写真のように。

雨に濡れたアスファルトと土の匂い。樹木の匂い、池の匂いが混ざり合う。急勾配を登り続けると、肌に触れる空気の温度が、ぐんと下がる。ハンドルを回し加速する力が僕に伝わる、原付を、相棒と呼びたくなる一瞬。

ライトが、雨に濡れて黒く、銀色に光る坂の上を照らす。ふと、小さな魚が銀色の水面を跳ねるように、路面がざざなみ、揺れているのが見えて、スピードを落とした。

一面広がる、小さな、無数のアマガエル。

大きな月に照らされて、無数に蠢く。無残に曳き潰され、白い腹は銀色に光る。その傍らで、方向を見失っている者。無心に跳ねて進んでいく多くの者たち。

その先には、貯水池がある。産卵に向かっているのだろうか。七百メートルほど、道を埋め尽くしている。

曳き潰さなければ、前に進むことはできない。

車輪の前にわざわざ飛び出てくる者もいる。原付を押して歩く方が、車輪と僕の足の下と、被害が大きくなると判断した。

僕は原付に跨り、潰し、進む。

小さな命が弾ける。僕が奪う命。月の光の中、白い腹と向かう者とで、銀色に波打つ美しい道。

ふと、小さな環奈が居たのは、こんな世界なんじゃないだろうかと思う。

充満する生臭い池の匂いに混じって、林に自生する楠の放つ、樟脳の匂いが一筋、横切る。

魂は、何かに向かい、静かに漂う。

青い火に。青い火になれ。

僕はただ、仮初めの鎮魂を願い、呟いた。

講評

高校を舞台にした、霊感のある環奈と「僕」の、これもまた不思議な物語。文章にわかりづらい点もあるのだが、それが欠点となっておらず、環奈の見ている世界の不思議さも相まって、奇妙な世界観を描くのに一役買っている。どこかかなしみを帯びた、幻想的な光景描写が印象に残る。

（審査員・角田　光代）

現代詩 ● 佳作④

栗鼠

いしかわつよし　作

本名・石川毅（いしかわ・つよし）。1968年生まれ。進路指導講師。横浜市鶴見区。

二十歳のころに
夏の午後
北鎌倉の樹の陰で
立ちどまり
避暑をしている
栗鼠をみた

五十を迎えた
この歳で
八幡さまの
境内に
サササと走る
栗鼠をみた

二十歳のわたしは
ただ一途
五十のわたしはすでに枯れ
なにごとにも

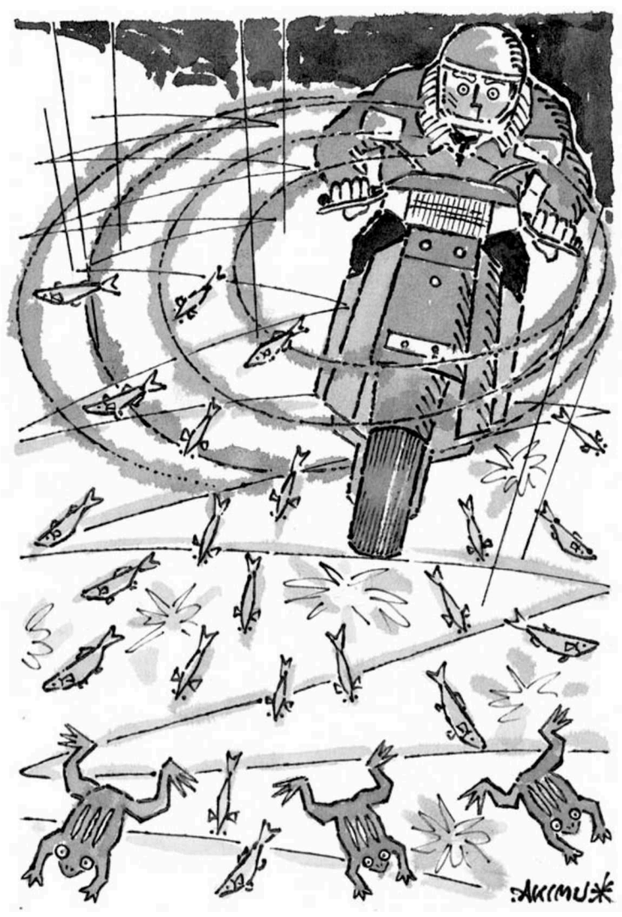
追うことをせず
栗鼠は逃げる

三十年前にみた
栗鼠は楽しかった
どこまでも
眼に遊ばせていたかった
いまは
動いた途端にあきらめる

講評

五十歳を迎え、人生の疲れを率直に詠（うた）っている。おもしろいところは、栗鼠の行動を写しとったことだ。栗鼠のすばしっこさと、自分の衰えていく行動、気力の対比がいい。老いを感じる寂しい詩だが、自分を見つめた結果なのだろう。

（審査員・金井　雄二）



井上　あきむ　画